

生きている証を探す授業

—「命とは何か」を考える—

構成・文・写真 制野俊弘（宮城県東松島市立鳴瀬未来中学校）

「命とは何か」—この問いに答えるのは容易ではありません。しかし、容易でないからこそ探るに値する問いでもあります。この問いを避けて通るということは、「生きるとは何か」「死とは何か」という問いも素通りすることになります。

私たち同志会は文化の学習を通して、主体者としての子どもの命を守り、育むことを目指してきました。決して運動文化の継承・発展のみを視野に入れてきたわけではありません。そこには生きた人間がいて、命ある人間がいて、その将来に生きるに値する社会を目指す人間がいるのです。

そこで今回は、生きているからだの主人公として、どのような認識が必要なのかを探る授業として、「生きている証を探す授業」を紹介します。特別な教材・教具はいりません。文字通り、からだ一つで手軽に行える授業です。すべての文化学習の基底に、「命の学習」を据えてみてはいかがでしょうか。きっとこれまでと違った「からだ」観、ひいては「生きる」観にたどり着くはずで



友だちの首のあたりを触って、どこに脈があるかを探しています。同時に、首の温かさも感じています。

友だちの胸に耳を当てて心臓の音を聞いています。どんな音が聞こえるか、細かく聞き取らせるといいですね。





友だちの鼻を押してその弾力性を確認しています。また、鼻をふさぐと口で息をし、口をふさぐと鼻で息をします。「両方ふさぐと苦しみます」と平気で言う強者も。

手首の脈を探っています。定番ですが、最近の子どもはなかなか見つけれません。それでも首、肘、足首、こめかみなどに脈があることを発見する子どももいます。



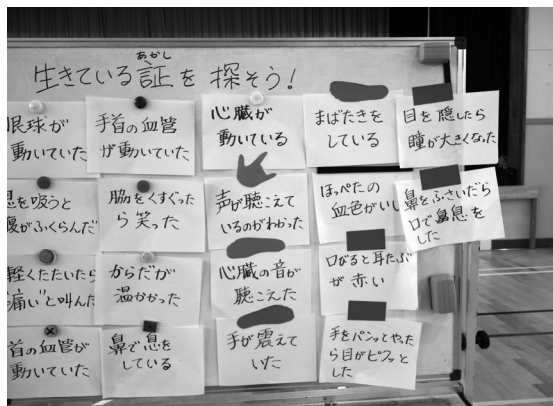
脇の下をくすぐるのも公認です。これ一つとっても「生きている証」なんですね。

目の前で手を叩いたり、突然手が見えると反射的に目をつむります。反射は動物の大事な能力です。





体をつくと大概の子どもは反応を示します。撫でたり、揺すったり、叩いたり…発する声すらも「生きている証」です。



子どもが発見した「証」を書き出していきます。「こんなに出てくるなんて」という声も聞こえてきます。

【子どもが発見した「生きている証」】

《体温に関わるもの》

- 手が温かい。
- 首が温かい。

《血色に関わるもの》

- ほっぺ・唇・耳が赤い。
- あっかんべーをした時、下のまぶたの裏が赤い。

《心臓・脈に関わるもの》

- 胸に耳を当てると心臓の音が聞こえた。
- 手首や首、肘、足首の脈が動いていた。

《反応や反射に関わるもの》

- まばたきをしていた。
- 眼球が動いていた。
- こちょこちょしたら笑った。
- お腹を押したら鼻穴が広がった。
- しゃべった。
- 髪を引っ張ったら痛がった（その他、多数）

《呼吸に関わるもの》

- 鼻と口を閉じたら苦しかった。
- 呼吸の空気が手に当たった。
- 息を吸う音が聞こえた。
- 呼吸をすると背中やお腹が盛り上がった。
- 鼻をふさいだら口で息をした。

《その他》

- 目を隠したら瞳が大きくなった。
- お尻や腕に弾力があった。
- 声が聞こえているのがわかった。
- お腹が「ギュルルル」と鳴っていた。
- 手が小刻みに動いていた。
- のどが動いていた。

【授業のポイント】

- ①実際に友だちのからだに触れたり、音を聴くなど、五感をフルに使って「生きている証」を探させます。
- ②ペアによって発見した「証」は細かく把握・描写させます。例えば、「お腹の音はどんな音？」「からだはどこも同じようにあたたかい？」「最も赤いのはどこ？」など。
- ③発見した「証」は類型化しながら掲示していくと子どもの思考が整理されていきます。

誰もが「命はかけがえのないもの」「命は大切なもの」であることは理解しています。しかし、その「命そのもの」を愛でる、慈しむためには、「命そのもの」に触れる必要があります。五感をフルに使って、自他の体の確かに「生きている証」を感じることは保健体育の授業の基本になります。

これが「体づくり運動」や保健の授業のベースに位置づいていきます。「なぜ、体は温かいの？」「お腹は鳴っているの？」「まばたきするのはなぜ？」「体温はどこも同じ温度なの？」など、問いが尽きません。体は「生きる」ために必要なことを学ばせる格好の教材になります。